

風土



しやぼん玉

神蔵器

瀧ざくら大地は夜を見送れり

しやぼん玉五重塔をさかのぼる

門をさす春満月の御輿庫

ピンクよりひらきて梨の花真白

「受胎告知」観て春愁の土不踏

五十一代明珍火箸春を呼ぶ
力士らの手形路面に花水木
山吹の十重に二十重に弥勒仏
D51に杉菜は焦げてしまひけり
能楽堂音を蔵しまへり花吹雪く
その上の羽衣伝説柳絮とぶ
亀鳴くを桂郎逝きてより聞かず



竹間集

同人作品



春雷

山路 紀子

トランペット吹くロボットや山笑ふ
猫が毛をととのへてゐる雛の夜
ふらここや父の膝より母のひざ
百年の蔵取り壊す春の雪
のらぼう菜轍の中に莖立てり
春雷や紙一片の父の墓
佐保姫に抱かれ大津皇子眠る

夜桜

岩木 茂

門川の音の消えたる朧月
さくら咲き満ちたり母は逝き賜ふ
霾や灰より拾ふ喉仏
誰がために花盗人となりてゐし
木と同じ息して桜人となる
夜桜や隣にははの座りをり
魂と遊びてをりぬ花吹雪

春あらし

相沢有理子

垣根越し翁より受くる露のたう
花椿季節外れの目白群れ
春の風邪蜂蜜に喉なだめをり
歯切れよき棟梁の指示風光る
春あらしかたまり歩く下校生
出湯の町河津桜の紅散らす
月おぼる動く歩道に人つらね

飛花落花

— 代田 青鳥 —

山羊の乳うすくれなゐに初ざくら
蝶湧きて葛城山の風戦ぐ
さへずりや二十四孝のさはり聞く
里びとの花いとほしむ弘川寺
西行へさくら千本又千本
西行の山こんもりとすみれ草
飛花落花西行堂にほむら立つ
『西行花伝』に恋の触りや花の昼
回廊の山肌に添ふ夕桜
堂守へ桜吹雪のはじまりぬ

卵黄の血の一筋やさくら冷え
水温む法然院へ入山す
山門の空凹ませて落椿
みひらきて一期一会の貴椿
ひたむきに燃えてこの世の貴椿
百号に散らして大阿蘇椿かな
嗚呼と言へばああといふなり散椿
霊鑑寺(尼門跡寺院)
「風折」てふ椿ありけり谷の御所
午後の日のやはらかくあり藪椿
産土の千年椿空へ咲く

山河集

同人作品



神蔵器選

醍醐寺

桜散る鶴島と亀島の上
筍の高値は店の上席に
四月馬鹿ジャンクメールを又消して
春宵やアブラボウズに舌鼓
草餅や骨董市に紛れ込む

杉本葉子

保田英太郎

春の雨古文書にある道を行く
ふらこ漕ぐ藤村詩集を膝に乗せ
菜飯出て齒に衣着せぬことを言ふ
野遊びに背中合はせの男女かな
浅蜷汁離ればなれの夫婦かな
二時間ほど娘の来て戻るバレンタインデー
杖えんぼう 太夫摺り集まりつ広がりつ

十井ゆう子

啓蟄や縄跳びの縄見付かつて
低気圧近づく予報けふ啓蟄
しきりなる雪解雫やティータイム

杉田春雄

投票に土足を許す春の雪
北上の流れ嬬やか青き踏む
古民家に裂織掛けし春炬燵
山眠る陽の当たる日も照らぬ日も
春の月眠つて重くなる子抱き

安永圭子

春風や魁夷の「道」に行方あり
アネモネの奏づる色を描きけり
捨てられぬもの増やしゆく日永かな
もてなしの話題に土壌木の芽和
ばね指のテープを切らす四月馬鹿

◇特別作品(抄)◇

浮橋

加藤たかね

有料の山伏峠あしび咲く
風光る村が市となる屋根瓦
陸の孤島と呼びし浮橋さくら咲く
一本の道の行方や春田打つ
黄水仙カボチャンと呼び信じあふ
太陽の土手初蝶のかぐはしき
芝ざくら空引き寄せて水鏡
石に乗る亀の縄張りのどけしや
浮橋を里と呼ぶ女わかめ漁
ひく波の幾重に洗ふ荒かじめ

風土独語／神蔵 器



春宵やアブラボウズに舌鼓

杉本薬王子

アブラボウズは大辞林によると、カサゴ目の海魚、全長一・五メートルを超える。肉は美味だが脂肪分が非常に多い、とある。また別の本では冬季に美味、胃はゆでて三杯酢に、えらは生で食べられる、などと書かれている。

おそらく作者にとっても初めての魚ではないかと思われるが、実際上の宴会も多い作者に、或る春の宵、アブラボウズが膳に付いた。漢字で書けば油坊主、どうもあまりうまそうではなかったが、実際食べてみると意外に美味であった。春宵一刻の宴、値千金の思いがあつたのではなからうか。

作者の今日の日常はあまりにも多忙のようだ。名声の上ることは勿論めでたいことであるが、名声と引換に健康を損ねるようなことがあつてはならない。掲出句を見たとき私は、句にも感心したが、それ以上に作者の心にゆとり、人生を楽しむ余裕が出て来たことだ。何より嬉しいことである。

菜飯出て歯に衣着せぬことを言ふ

保田英太郎

人間は時よって単純、いとも簡単にうまいものを食べれば優しくなり、腹が減ると怒りつぽくなる。まして母の味、素朴な菜飯

は人の心をやさしく素直にする。お互いに腹を割つて思うことを思うまま歯に衣着せぬに語りあえるときだ。

杖大夫えんぶり摺り集まりつ広がりつ

土井ゆう子

えんぶりはいまは青森県八戸地方を中心に伝わる豊年予祝の行事である。えんぶりのえぶりは農具の一つで、私も子供の頃、荒い歯のような切り込みのある板に、一本の長い竹の柄を取りつけたもの（えぶり）を持たされ、田植前の田の最後の均しをやらされたことがあつた。

祭のことは百聞は一見に如かずであるが、通常十五、六人から三、四十人が一組になり、馬の頭を形どつた鳥帽子をかぶつた太夫、笛、太鼓、手平鉦の囃し方。それに轎や采配をもつた親方衆の祝い唄、「摺り集まりつ広がりつ」で、中たらずと雖も遠いとからず、古式ゆかしい演舞のさまが眼に見えてくる。

春風や魁夷の「道」に行方あり

安永 圭子

魁夷の「道」は昭和二十五年第六回日展に出品された。青森県八戸の種差海岸にある牧場で取材されたものである。

夏の早朝の草原の中に、ただ一すじの道がある。牧場であるから放牧された馬もいることだろうし、種差海岸の近くには灯台なども見える風景であつたらう。しかし魁夷はこの道一すじに構図を絞り、他の一切のものを省いてしまった。魁夷を置いて誰がこ

んな大胆な構図をとれるだろう。縦一三四センチ、横一〇三センチ、魁夷は「この作品の象徴する世界は、私にとって遍歴の果でもあり、また、新しく始まる道でもあった」と書いている。

安永さんの「魁夷の『道』に「行方あり」の「行方あり」も、この絶望と希望を織り交ぜてはるかに続く宇宙、一筋の魁夷の心の道であらう。

風土集



神蔵器選

浦賀道 十三峠の初桜 横須賀

平田紀美子

本名はウイリアムアダムス青き踏む

交番に花束持ちちて卒園子

山椿五時閉門の円覚寺

方丈に風入れてみて牡丹の芽

風光る野辺の送りの紙細工 津山

生田恵美子

脱ぎ置きし物を遠くに春田打つ

春泥の筵渡りて法事客

撒く灰の風の渦巻西行忌

初蝶と短く呼んでそれきりに

二分の一成人式やチューリップ 東京

教科書を十字に束ね鳥曇

六年生送るアーチやアネモネ咲く

大ぶりな母のおにぎり花菜咲く

春障子人生ゲームのルーレット

スカートの最後の寝圧し卒業す 東京

寝返りの臍の闇の広さかな

中心の埋まらぬパズル春障子

コナコーヒーカサブランカの顔白し

転がして付けるパン粉や日の永し 上尾

春の鳶龍太の視線より消ゆる

汽罐車の笛登り来る春の山

飾りたる雛の昔に座りけり

田螺鳴いて浮き上りくる泡一つ

吊り橋に雪解のひかり届きけり

春昼やパンの渦巻ほどき食ぶ 川崎

ふたすぢの雲の交はる遅日かな

春塵や写真の傾ぐ額のうち

ただならぬ雨を伴ひ桜まじ

球根植うひとつひとつを手に載せて